

ニホンジカ被害対策現地検討会

〔技術普及課〕ニホンジカ被害対策として平成 23 年度から取り組んでいる「囲いワナ」による捕獲については、年々捕獲頭数は増加しているものの、費用対効果からみると成果が上がっているとは言い難い状況となっています。

9 月 9 日、囲いワナの今後の取り扱いを検討するため、東信森林管理署及び南信森林管理署管内において有識者、行政機関、猟友会等が参加して被害対策現地検討会を開催しました。

午前は、「囲いワナ」の設置状況の確認、これまでの捕獲状況や出没状況、信州大学と連携して取り組んでいるデコイ（囷として設置したニホンジカの模型）を設置して誘引効果を検証する取り組み等について説明しました。

午後からは、長和町和田コミュニティーセンターにおいて、国立研究開発法人森林総合研究所の小泉透氏から「囲いワナの特徴」について、信州大学農学部の泉山茂之氏からは「ニホンジカの季節移動」についてそれぞれ講演をしていただき、その後、参加者による意見交換を行いました。

意見交換での主な意見は、「囲いワナの構造的には問題ないが、その前の段階（設置場所の選定など）に問題がある」「森林内に大型の囲いワナを設置している例はまれ」「森林内では成果が上がらないのではなく、囲いワナ的能力に限界があるのでは」などの意見が述べられました。

今回の検討会で出されたこれらの意見については、今後、「中部森林管理局ニホンジカ被害対策プロジェクトチーム」等において、対応策を検討する参考とすることとしています。



現地説明